

ナマケモノの生き方

中川 圓

カメラマン

先日、ミツユビナマケモノの撮影で南米・エクアドルを訪れた。ミツユビナマケモノは約7 cmもある指(爪)を前足と後足それぞれに3本ずつ持つ中南米特有の哺乳類だ。この長い爪を上手に使って木にぶら下がり、睡眠や食事から交尾・出産・子育てにいたるまで、一生のほとんどを樹上で生活する珍らしい種としても知られている。英語でSloth、スペイン語でPerezosoと呼ばれ、いずれの単語も「怠惰、ものぐさ、怠け者」という意味をあわせもつという、何とも気の毒なネーミングの持ち主でもある。

この愛嬌たっぷりの動物を通じて、人間の消費生活と自然環境の関係を見直そうというNPO「ナマケモノ倶楽部」がこのほど発足した。世話人は日本内外の自然愛好家やボランティアらである。

筋肉が他の動物と比べて極端に少なく、一日中ぶらぶらとぶら下がりながら食べたり眠ったり…。1週間から10日に1度だけ、生活している木の根元に降りて穴を掘り、排泄物を出して埋める……など、ナマケモノの生き方を「エネルギー消費が少ない、リサイクル型の共生モデル」ととらえ、「より速く・大きく・強い」方向へ向かう現在の人間社会を見直そうというのだ。従来からあったような「〇〇を救おう」といった単なる保護活動ではなく、「ナマケモノになってしまおう!」と

呼びかける発想がおもしろい。

ナマケモノはアルマジロやアリクイと同じ貧歯目(ひんしもく)に分類されていて、普段は木の葉をゆっくり咀

嚼しながら食べる草食動物だ。しかしメスに限って、一生のうちわずか数回だけ動物性タンパクを口にすることがあるという。出産後に自らの胎盤と臍帯を食べるというのだ。

今回エクアドルでの調査に同行させていただいた進化生物学研究所・石井力さんは、日本でナマケモノの出産に「立ち会った」数少ない1人だ。「2本の足で木にぶら下がり、股の間に手を伸ばして自ら子供を取り上げた後、5～6時間もかけて、まるでスルメを喰いちぎるようなかっこうで

少しずつ臍帯を食べていくんです。貧歯目といわれるとおりに不揃いな歯しか持っていないので、臍帯のような筋を食べるには相当な労力が必要なのです。しかし、子供に抵抗力をつけるための濃い初乳を出すためには必要なことだと、本能的にわかっているんですね。母親の

すごさというか、子供を産む執念みたいなものを感じました」と語る。出産はナマケモノが「怠け者」でなくなる、一大イベントなのだ。

このすさまじい出産を終えた後は、子供が母の胴に巻き付いて乳を吸い、数か月して葉を食べ始める。やがて独り立ちするようになると、母は自分の住む木の一部を子に譲り渡すのだという。そして母子ともに、ぶ～らぶら・の～んびりと暮らしていくのである。

日々汲々と暮らし、野性を失い、子供をつくることさえ難しくなってしまった私たちの社会。今こそ「ナマケモノの生き方」から学ぶことは多い。

